四国大学紀要，(A) 56：91 － 101，2021
Bull. Shikoku Univ. (A) 56：91 － 101，2021

四季のはじめとはての和歌――古今和歌集と古今和歌六帖を中心に

田中智子

【論文概要】四季の歌を季節の推移に即して配列し、さらに各季の冒頭には季のはじめの歌を、各季の末には季のはての歌を配するという歌集の構造は、『古今集』撰者の生み出したものである。『古今集』の影響力は大きく、後世の『古今和歌六帖』も、そのあり方を踏襲しながら独自の歌集の構成を築き上げたのであった。

それらの各季のはじめとはての歌には、節月的四季観によるものと暦月的四季観によるものとが混在していることが指摘されてきたが、個々の歌がいずれの四季観によったものかについては、必ずしも明解が得られていないと思われる。本稿では『古今集』と『古今和歌六帖』を中心に、季のはじめとはての歌に具体的に検討を加えながら、それらがいかなる四季観に基づく歌であるのか、またその歌の表現上の特徴はどのようなものであるかを指摘し、『古今集』、『古今和歌六帖』の歌集の構成意識についても論じた。

【キーワード】古今和歌六帖　古今和歌集　四季歌　三月尽　二元的四季観

はじめに

『古今和歌六帖』（以下『古今六帖』）の歳時部には四〇の項目が立てられており、それらは概ね四季の推移に即して配列されている。特に、春夏秋冬の各季の「はじめ」と「はて」を示す項目――春立つ日、春のはて、はじめの夏、夏のはて、秋立つ日、秋のはて、初冬、歳の暮れの計八項目――がもれなく均等に配されていることには注目されよう。本稿の目的は、『古今集』四季部と『古今六帖』歳時部を中心に、平安朝の歌集において四季それぞれのはじめとはてがどのように位置づけられてきたかを明らかにすることにある。四季の移ろいに即して歌を配列する歌集において、各季のはじめとはてにどのような歌が配されているかは、歌集全体の構成意識にも関わる重要な問題とみられるからである。

そもそも、四季の推移にしたがって歌を並べるという歌集の配列構造は、紀貫之ら『古今集』撰者が生み出したものであった。『古今集』春部巻頭には年内立春の歌が、春部巻末には三月尽の歌が配され、その巻頭歌・巻軸歌の間に、春の景物を詠んだ歌々が時系列に即して配列されている。この『古今集』四季部の配列構造が後世に与えた影響は甚大であり、その後の勅撰集や『古今六帖』をはじめとする私撰集など多数の歌集にその配列法が継承されたのであった。ただし、何をもって各季のはじめとはてとみなすか――より具体的にいえば、暦月と二十四節気のいずれを詠んだ歌を

当該箇所に配するか——については、歌集によって差異が存するようである。

当該の問題をめぐる先駆的な研究として、田中新一『平安朝文学に見る二元的四季観』[1]がある。田中は、平安朝の人々が暦月と二十四節気の両者に基づく四季観によって生活していたとしてこれを「二元的四季観」と名付け、『古今集』四季部の配列構造にもその二元的四季観が反映していると論じた。なるほど当時の人々にとって、立春の日をもって春の到来とする節月的四季観と、三月尽をもって春の終わりとする暦月的四季観とが併存、両立するものであったとの指摘は正鵠を射ていよう。しかしながら、そのいわゆる二元的四季観が、『古今集』をはじめとする和歌の表現様式にどれほど反映しているかをめぐっては、再考の余地があるのではなかろうか。

以上の問題意識から、本稿ではまず、時系列に即した四季歌配列の嚆矢とされる『古今集』四季部の配列構造を再検討したい。そのうえで『古今六帖』歳時部の配列、構成に考察を加えることとする。

一　古今集四季部にみる季節のはじめとはて

本節では、『古今集』四季部の各季のはじめとはてとにどのような歌が配されているかについて、具体的に再検討を加えることとしたい。まず季のはじめであるが、春部冒頭の二首は立春の日の歌、秋部冒頭の二首は立秋の日の歌であるのに対し、夏部と冬部の巻頭歌はそれぞれいかなる日の詠歌か明示されていない。一方で季のはてであるが、春部巻末には「弥生のつごもりの日」の歌二首と「春のはて」の歌が一首、秋部巻末には「秋のはつる心」を詠んだ歌一首と「長月のつごもりの日」の歌が二首配されている。それに対し、夏部巻末には「水無月のつごもりの日」の歌一首、冬部巻末には「師走のつごもり」や「年のはて」の歌が複数首配されている。

以上のことから田中新一は、『古今集』四季部における各季のはじめとはてを次のように整理した。春部・秋部冒頭には立季日の歌がおかれ、それは春部・秋部末尾の「季のはて」の詞書をもつ歌と対応する。一方で、夏部・冬部のはてに六月尽・歳暮の歌が配されていることからすれば、春部・秋部においても正月一日・七月一日を季のはじめとする暦月的四季観が「無言のうち」にあったはずであり、その暦月意識と対応するものとして春部・秋部のはてには三月尽・九月尽の歌がおかれている。つまり春部・秋部の巻頭は立春・立秋という節月的な季のはじめを明示しつつ、正月一日・七月一日の暦月的な季のはじめを暗示したもの、春部・秋部の巻末は節気と暦月との二元的四季観を明示したものといえる。一方で夏部・冬部の季のはじめは明示されないが、季のはては六月尽・歳暮という暦月的四季観を示したものである——以上が田中の議論の骨子である。

この田中の見方は、『古今集』の配列構造から節月的四季観と暦月的四季観の二様の四季観を読み取り、さらに春と秋の二季、夏と冬の二季にそれぞれ近しい季節意識がみられることを明らかにした点で重要な意義をもつ。現在でも田中論をふまえた論考がみられる[2]のも故なしとしないのであるが、しかし、春秋の季の「はて」のとらえ方をめぐっては疑問が残るように思われる。とりわけ看過できないのは、『古今集』春部と秋部との巻末を、暦月と節月の二元的四季観によった配列とみなしてよいかという問題である。

ここで改めて、春部・秋部それぞれの巻末の歌群の表現に検討を加えてみよう。

◆春下・巻末

①　弥生のつごもりの日、花つみよりかへりける女どもを見てよめる　躬恒

とどむべき物とはなしにはかなくもちる花ごとにたぐふこころか　（一三二）

②　弥生のつごもりの日、雨のふりけるに藤の花ををりて人につかはしける　　業平朝臣

ぬれつつぞしひてをりつる年の内に春はいくかもあらじと思へば　（一三三）

③　亭子院の歌合の春のはてのうた　　躬恒

今日のみと春を思はぬ時だにも立つことやすき花の蔭かは　（一三四）

◆秋下・巻末

④　秋のはつる心をたつた河に思ひやりてよめる　貫之

年ごとにもみぢばながす竜田河みなとや秋のとまりなるらむ　（三一一）

⑤　長月のつごもりの日大井にてよめる

ゆふづく夜をぐらの山になくしかのこゑの内にや秋はくるらむ　（三一二）

⑥　同じつごもりの日よめる　　躬恒

道しらばたづねもゆかむもみぢばをぬさとたむけて秋はいにけり　（三一三）

田中によれば、①・②、⑤・⑥のように三月または九月の「つごもりの日」と詞書に記された歌は、暦月的四季観に基づく季のはてを示した歌であるのに対し、詞書に「春のはて」と記された③や「秋のはつる心」と記された④は、節気における季のはて、すなわち立夏の前日と立冬の前日を示したものであるという。なるほど、田中の指摘するとおり、春部・秋部の巻末に配された歌群のうち、詞書に「つごもりの日」と記された歌と、季の「はて」と記された歌との二様が存することは注目に値しよう。

しかしながら結論からいえば、詞書に「つごもりの日」とある歌も季の「はて」とある歌も、ともに三月尽・九月尽を詠んだものととらえるべきではあるまいか。すなわち、「弥生のつごもりの日」（①・②）と「春のはて」（③）との書き分けは、二元的四季観に配慮しての所為ではないとみられるのである。これはおそらく、①・②が三月尽の当日に詠まれた歌であったのに対し、③が、三月尽ではない日（実際には三月十三日）に「三月尽の心」を詠んだ歌であったために、①・②には「つごもりの日」という日付が明記され、一方で③には「春のはて」との詞書が付されたものと考えられよう。『古今集』四季部の他の歌の詞書において日付が明示される場合、その日付がもれなく作歌の日を指していること[3]も、如上の考えを裏付けている。以上の推測が正しいとすれば、「秋のはつる心」を詠んだという④も、立冬の前日ではなく九月尽を詠んだものととらえてよいこととなる。

二　亭子院歌合と古今集春部

前節までの推測は、③の躬恒歌の出典からも確かめられる。③は、『古今集』の詞書にみられるように、延喜十三年（九一三）三月十三日に行われた亭子院歌合[4]を出典とする。当該歌合が『古今集』奏覧の年とされる延喜五年以後の開催であることから、③は『古今集』成立後の増補改訂の問題にかかわる重要な歌であるが、少なくとも同歌は現存の『古今集』において春部の巻軸歌に位置づけられており、その点でもゆるがせにできない一首である。

さて、亭子院歌合の題は二月・三月・四月・恋の四題で、二月と三月は十番ずつ、四月と恋は五番ずつ披講された。三月題の最後の番は左右ともに躬恒の詠歌で、そのうち右方の歌が③の『古今集』所載歌である。左にその番と、次の夏題冒頭の番を掲げよう（なお、三月題の右歌は③と同歌だが、わかりやすいよう番号を⑧と振り直した）。

左持　　躬恒

⑦花見つつ惜しむかひなく今日暮れてほかの春とや明日はなりなむ　（三九）

右　　躬恒

⑧今日のみと春を思はぬ時だにも立つことやすき花の蔭かは　（四〇）

夏

四月五首

左勝　　雅固

⑨深山出でてまづ初声は郭公夜深く待たむ我が宿に鳴け　（四一）

右　　躬恒

⑩今日よりは夏の衣になりぬれど着る人さへはかはらざりけり　（四二）

四月題の冒頭の番は両首ともに夏のはじめを詠んだ歌で、特に右歌⑩は、夏の衣になる「今日」、つまり更衣の日である四月一日を主題としたものである。一方で⑦・⑧はともに、春の暮れる「今日」を詠んだ一首である。⑦・⑧が三月題の末尾に位置づけられていることからみて、ここでいう「今日」は三月尽のことを指すものとみるのが穏当ではなかろうか。ただし、⑦・⑧の解釈には議論があるので、その解釈について私見を述べておきたい。

⑦で問題となるのは第四句にみえる「ほかの春」の歌句の解釈である。Ⓐ「春とは違う季節」の意とする説[5]や、Ⓑ「今日が暮れるとここでは夏になるが、別の里では春なのだ、ということ」と注する説[6]に対し、Ⓒ田中新一は当該歌を四月に立夏をむかえる年の三月尽を詠んだものと読み解き、「いくら惜しんでも花の春三月は今日が末日、その日もすでに暮れて、明日は四月、花の春は残ってもそれは四月の春である」と解釈する。第四句の「ほかの春」が、同時代に類例のない特殊な歌句であるがゆえに多様な解釈が生まれたのであろう。これに対して稿者は、Ⓑ説「別の里では春なのだ」の意にとるのがふさわしいと考えるのだが、Ⓑ説をとなえる『古今和歌六帖全注釈』には詳細な注釈がみえないため、当該躬恒歌と近しい時代に詠まれた「ほかの」の表現の用例に検討を加えておきたい。

⑪　同じ年の八月十三夜の夜、左衛門督の殿にて、酒などのついでにて

秋の夜のあはれはここに尽きぬればほかの今宵はつきなかるらむ　（躬恒集Ⅳ・二七五）

⑫　天暦の御時、方わかちて前栽合せさせたまひけるに、中宮の御かたに、花の枝に蝶のかたつくりて、つけさせたまひけるに

九重の露のおけばや花の色のほかの秋にはにほひまされる　（清正集・二九）

⑪は『躬恒集Ⅳ』にみえる歌で、詞書によれば、延喜十六年の八月十三夜、仲秋の名月の頃に左衛門督（藤原定方か）の邸で宴を行った折に詠まれたものらしい。一首は「尽きぬれば」と「つきなかるらむ」（「ふさわしくない」の意の「つきなし」）に「月」を掛けたもので、歌意としては、「秋の夜の情趣はこの左衛門督の邸の月に尽きているので、他所での今夜は月もみえず、十三夜にふさわしくないことだろう」くらいであろう。「ここ」（左衛門督邸）と「ほか」（他所）での今宵のありさまを比較し、「ここ」の今宵の素晴らしさを詠んだ歌となっている。

また⑫はやや時代が下り、村上天皇が内裏で前栽合を行ったときの藤原清正の詠歌とみられる。「この内裏で、いくえにも露が置くからだろうか、他所での秋よりも花の色がいよいよ匂いやかなのは」くらいの歌意であろう。当該歌の眼目は、「九重（内裏）」での秋のさまと「ほか」の場所での秋のさまを対比し、内裏の素晴らしさを讃える点にある。

⑪・⑫の用例によれば、⑦「花見つつ惜しむかひなく今日暮れてほかの春とや明日はなりなむ」の「ほか」もまた、「ここではないほかの場所」の意に解せよう。すなわち全体の歌意としては「花を見ながら惜しむかいもなく今日（三月尽）が暮れ、春も暮れると、ここの春は去ってしまって、明日にはほかの場所の春となってしまうのだろう」となる。

これは実体をもたない「春」を擬人化した歌で、「春が立ち去り別の場

所に移動することで夏が到来する」という発想を根底にもつものである。類想の歌は『古今集』にもみえる。

⑬　春を惜しみてよめる　　元方

惜しめどもとどまらなくに春霞帰る道にしたちぬと思へば　（一三〇）

春が終わることを「春が道を通り去ってゆく」と形容した一首である。こうした類想歌の表現をふまえ、明日には去ってしまう春を愛惜した⑦が詠まれたと考えられるのである。

では、⑧「今日のみと春を思はぬ時だにも立つことやすき花の蔭かは」の解釈はどうであろうか。田中新一は当該歌を、三月中に立夏のあった年の三月尽の歌とみて、「春がまだ残って暦月四月にまでずれ込むような年の三月末日」であってさえ「花の下は立ち去り難いのだから、三月末日で春が終わる今日この日の惜春の情といったら……」と解する。しかしそのように屈折した解釈をせず、単に三月尽の感懐を詠んだ歌と素直に読んでも、一首の趣向はじゅうぶん理解しうるのではなかろうか。すなわち、「春を今日限りと思わないときでさえ、立ち去ることがたやすい花の蔭であろうか。まして春のはてである三月尽の今日は、立ち去りがたいものだ」くらいの歌意となる。ここには、三月尽をもって春の終焉とみなす、暦月的四季観がたしかに認められよう。

以上本節で検討してきたことをまとめれば、亭子院歌合では、三月題の末尾の番には三月尽の歌が、四月題の冒頭の番には四月一日の歌が配されたものと考えられる。それらはいわゆる「二元的四季観」による歌ではなく、純粋な暦月的四季観にしたがって、退去する春への愛惜、到来する夏への感懐を詠んだ歌なのであった。こうした亭子院歌合における③（＝⑧）歌の位置づけをふまえれば、やはり当該歌は、三月尽詠として『古今集』春部の巻末に配されたものと考えられるのである。

三　古今集撰者と季節のはじめ・はて

前節までの検討をふまえると、『古今集』四季部における季のはじめとはては〈表Ⅰ〉のように整理できよう。

〈表Ⅰ〉

	はじめ	はて
春	立春	三月尽
夏	明示せず	六月尽
秋	立秋	九月尽
冬	明示せず	歳暮

ただし、夏部と冬部の巻頭歌では日付が明示されていないものの、基本的には暦月的四季観によるところが大きいと思われる。夏部の二首目には「卯月に咲ける桜を見てよめる」の詞書のもと「あはれてふことをあまたにやらじとや春におくれてひとり咲くらむ」の歌が、冬部の巻頭には「竜田川錦織りかく神無月時雨の雨をたてぬきにして」の歌が配されており、これらはいずれも卯月・神無月という暦月にかかわる歌だからである。

さて、このように『古今集』における季のはじめとはてを整理したとき、注目されるのは、これらの季のはじめとはての歌のなかに同集撰者の歌が多数みられることである（ただし季のはじめがいつであるかを明示しない夏と冬の巻頭歌群には撰者の歌はみられない）。たとえば春・秋のはじめに位置する立春・立秋の歌群の第二首はいずれも貫之の歌である。また、春のはてに位置する三月尽詠三首のうち二首は躬恒の歌、秋のはてに位置する九月尽詠三首のうち二首は貫之、一首は躬恒の歌。夏のはてに位置する六月尽詠一首は躬恒の歌、冬のはてに位置する歳暮詠五首のうち一首は貫之、一首は躬恒の歌である。

如上の事実からは、四季部の歌を季節の推移に即して配列しようと構想

した『古今集』撰者が、各季のはじめとはてに撰者自身の詠歌を配することで、緊密な四季歌の配列構造を築き上げたことがうかがわれよう。もとより三月尽を春のはてとみなす発想は白居易らによる漢詩の表現に端を発するものであり、その後日本漢詩にもその表現が受容され、さらに九月尽を主題とする漢詩までもが詠まれるようになっていったことは、従来指摘されてきたとおりである[7]。また、そのような漢詩の潮流を受け、六歌仙時代頃から三月尽の和歌が詠まれるようになったとの指摘もある[8]。なるほど、たしかに六歌仙の在原業平は三月尽を主題とした歌を早くに詠んでおり（先掲②）[9]、白詩の表現を和歌に積極的に取り入れた例として注目されるが、しかし、三月尽詠を含む春夏秋冬すべての季のはじめとはてにどのような歌を据えるかを意識的かつ体系的に整理し、ひとつの歌集の構造として提示したのは、『古今集』撰者による革新的な試みだったのではあるまいか。

とりわけ、『古今集』夏部の巻末に見られる躬恒の歌は象徴的であろう。「水無月のつごもりの日によめる」との詞書をもつ当該歌は、六月尽を夏から秋への季節の分水嶺とみなした歌で、その日に夏と秋とが空ですれちがうのだ、とした発想は秀逸である。

⑭夏と秋とゆきかふ空のかよひぢはかたへ涼しき風や吹くらむ　（一六八）

六月尽を詠んだ歌の前例は少なくとも現存の諸歌集にはみえず、⑭の躬恒歌が最初期のものといえる。ここで想起されるのは、『古今集』の「四季部は撰者を含めた当代の歌が過半数以上で、撰者たち自身がもっとも意図的に関与したものである」と述べ、特に貫之や躬恒の新詠を多く加えることで部が構成された可能性があるとした菊池靖彦[10]の指摘である。四季部の編纂に注力した貫之ら撰者は、春夏秋冬のはじめとはてにどのような歌を配するかにも細心の注意を配り、『古今集』編纂のための新詠を含む自作歌を季のはじめとはてに配することで、如上の整然とした四季部の構造を生み出したものとみられるのである。

四　古今六帖にみる季節のはて

本節では、前節までで再検討を加えてきた『古今集』四季部の配列構造をふまえ、『古今六帖』歳時部にみられる季のはじめとはての項目について考えてみたい。先述のように、季のはじめとはての歌の配列に細やかな意識をめぐらせた歌集の嚆矢が『古今集』だとすれば、それを項目というかたちで明示した歌集の嚆矢が『古今六帖』といえよう。旧稿[11]でも述べたように、『古今六帖』の構成には『古今集』の配列構造に倣ったとみられる箇所が散見されるが、『古今六帖』歳時部の各季のはじめとはての項目にも、やはり『古今集』の影響が認められるのである。そこで本節では、『古今六帖』がいかに『古今集』の配列構造をふまえながら歳時部の構成を構築したのかを検討することとしたい。『古今六帖』の歳時部の季のはじめとはての項目を、〈表Ⅱ〉として掲げよう（なお、左表にあげていない〈初秋〉という項目もみられるが、稿者はこれを、「七月」を意味する項目ととらえている。この問題をめぐって詳しくはかつて論じたことがある[12]）。

〈表Ⅱ〉

	はじめ	はて
春	春立つ日	春のはて
夏	はじめの夏	夏のはて
秋	秋立つ日	秋のはて
冬	初冬	歳の暮れ

旧稿[13]で指摘したように、『古今六帖』の総目録では歳時部のもとに春夏秋冬の四分類があり、そのもとに諸項目が配されているが、本来歳時部の内部は春夏秋冬に四分されておらず、部の下に直接諸項目が配されたもの

とみられる。ただしそのことは、同集撰者が春夏秋冬の四季を区別しなかったことを直ちに意味するのではない。むしろ、各季のはじめとはての計八項目が整然と配されていることからして、同集には、歳時部の内部を四季に分かつ意識が明確に存することがうかがわれよう[14]。この八項目のうち、春と秋のはじめの項目〈春立つ日〉、〈秋立つ日〉は節月的四季観に基づくもの、冬のはての項目〈歳の暮れ〉は暦月的四季観に基づくものと知られるが、問題となるのは、夏・冬のはじめと春・夏・秋のはての項目である。これらの項目が暦月的四季観によるものなのか、節月的四季観によるものなのかについては、必ずしも明解が得られていないと思われる。

そこでまず本節では、春・夏・秋のはての項目に検討を加えたい。左に、〈春のはて〉の歌すべてを掲げよう（なお㉑は先掲⑦の躬恒歌と同歌である）。

⑮行く春のたそかれ時になりぬれば鶯の音も暮れぬべらなり　（六一一）
⑯つれづれと花を見つつぞくらしつる今日をし春の限りと思へば　（六一二）
⑰声たてて鳴けや鶯一とせに二たびとだに来べき春かは　（六一三）
⑱花もみなちりぬる宿はゆく春の故郷とこそなりぬべらなれ　（六一四）
⑲花のもとたつことうくもなりぬるか春は今日をし限りと思へば　（六一五）
⑳ちる花のもとにきてしぞ暮れはつる春の惜しさもまさるべらなれ　（六一六）
㉑花見つつ惜しむかひなく今日暮れてほかの春とや明日はなりなん　（六一七）

⑯・⑲・㉑はいずれも春の暮れる「今日」を詠んだ歌であるが、歌の表現内容からは、三月尽という暦月上の春のはてを詠んだものか、節分[15]という節月上の春のはてを詠んだものか、即断することは難しい。そこで歌の出典をみてみると、亭子院歌合で披講された㉑（＝⑦）は先述のように三月尽詠とみられるし、既に指摘されるように[16]、⑯は出典『躬恒集Ⅱ』の詞書に「三月尽を」とあることから三月尽詠とみられよう。⑲は出典未詳であるが、⑯と下の句の表現が酷似することからして、同様に三月尽詠と考えられようか。

その一方で、⑮・⑰・⑱・⑳のように、春の終わりを主題とするものの、その終末の一日としての「今日」を詠んだわけではない歌もみえる。⑮・⑰は鶯の音に、⑱・⑳は散る花の姿に春の暮れを知り、春を愛惜する歌であるが、いずれもその表現内容からは三月尽詠とも立夏前日詠とも断定しがたい。ただし⑮・⑱・⑳はすべて「三月つごもり」の詞書のもと『貫之集Ⅰ』に収められており、⑰は『古今集』において三月尽詠歌群の直前に位置づけられていることからすれば、これらの歌も、やはり三月尽の惜春の情を詠んだ歌として『古今六帖』〈春のはて〉項に収められたとみるべきであろう。

既に『古今集』春部において、三月尽日に去ってゆく春を愛惜する四季観が提示されていたのだが、『古今六帖』はその四季観を継承し、〈春のはて〉項に三月尽の惜春の情を詠んだ歌を数多く集成したのであった。その際、躬恒（⑯・㉑）や貫之（⑮・⑱・⑳）ら『古今集』撰者の歌が核となっていることからも、やはり、『古今集』撰者が三月尽詠を集中的に詠み、後世に大きな影響を与えたことがうかがい知られるのである。

次に〈夏のはて〉の四首をみてみよう（なお㉕は先掲⑭と同歌である）。

㉒夕立に夏は往ぬめりそほちつつ秋の境にいまやいたらん　（一一一一）
㉓今宵しも稲葉の露のおきしくは秋の隣になればなりけり　（一一一二）
㉔西へだに夏の往にせば慕ひつつやがて恋しき秋は見てまし　（一一一三）
㉕夏と秋とゆきかふ空のかよひぢにかたへ涼しき風や吹くらん　（一一一四）

㉕は『古今集』夏部の巻軸歌で、六月尽の詠歌である。その他の三首は出典未詳歌であるが、興味深いのは、三首がともに、㉕と同様、夏と秋とを擬人化している点、また、夏と秋との「境界」が存在するという発想を根底にもっ

ている点である。たとえば㉒は「夕立とともに夏は去って行くようだ。濡れそぼちながら、秋との境に今着くのであろうか」という一首である。現実には夏と秋との「境」などは存在しようはずがないのだが、「夕立とともに夏が旅人のように立ち去って秋との境界線を今にも越えようとしており、その境界を越えたときに秋がやって来る」と着想した点にこの歌の面白みがある。また、㉓は、夏が来る前日の宵、稲葉に露が置くのは秋が「隣」に来たからだと詠んだもの。㉔は、陰陽五行説で秋の方角とされる西に夏が行ったならば、恋しい秋に会えるだろうに、と詠んだもの。いずれの歌も夏の終わりを惜しむのではなく、「恋しき秋」の到来を涼やかな風や置きしく稲葉の露に敏感に感じ取ろうとする、秋を待望する心に根ざした歌である。

㉒～㉔の歌の成立年代は不明であるが、これらの歌は『古今集』夏部巻軸歌である㉕（＝⑭）の影響下に詠まれた可能性があるのではなかろうか。㉒にみえる「秋の境」や㉓にみえる「秋の隣」といった表現は、夏と秋が隣接し、片方には涼しい風が吹くのだと詠んだ㉕ときわめて近しい発想のものといえる。前節で述べたように、各季、とりわけ夏のはてを詠んだ歌の前例がほとんどないなかで、『古今集』夏部の巻末に位置する㉕（＝⑭）の影響力は大きかったとみられるのである。とすれば、この〈夏のはて〉の歌群は、六月尽詠を核として、夏のはてに秋を待望する心を詠んだ歌を集めたものと考えられよう。

最後に〈秋のはて〉所載の一一首のうち五首をみてみよう。

㉖今日ありて明日過ぎななん神無月時雨にまがふ紅葉かざさん　（一九八）

㉗長月の有明の月は見えながらはかなく秋は過ぎぬべらなり　（一九九）

㉘草も木も紅葉ちりぬと見るまでぞ秋の暮れぬる今日はきにける　（二〇〇）

㉙時雨ふる神無月こそ近からし山のおしなべ色付きにける　（二〇一）

㉚いづ方に夜はなりぬらんおぼつかな明けぬ限りは秋にや有るらん　（二〇三）

㉖、㉘は秋の暮れる「今日」に、㉚は秋の暮れる「夜」に、秋を惜しんだ詠歌である。また㉖、㉙では時雨ふる神無月が間近に迫っていることが詠まれ、㉗では長月の有明の月——つまり九月下旬の明け方にみえる月——とともにはかなく秋が終わってゆくことへの感懐が詠まれている。これらの〈秋のはて〉項の歌は基本的には九月尽詠と解しうるものであり、〈秋のはて〉項が暦月的四季観に基づいていることがうかがわれよう。

以上みてきたように、〈春のはて〉〈夏のはて〉〈秋のはて〉、そして〈歳の暮れ〉項は、基本的には暦月的四季観における季のはてを示したものと考えてよいだろう。それは『古今集』四季部における季のはてのあり方を継承しつつ、『古今集』歌の類想歌を中心に収集したものであった。ここに、『古今集』の配列構造を丹念に読み取り、それを「項目」という明示的なかたちで表しつつ、同集なりの構成を築き上げた、『古今六帖』撰者による歌集編纂の基本姿勢が看取されるのである[17]。

五　古今六帖にみる季節のはじめ

最後に本節では、『古今六帖』歳時部における季のはじめの項目にいかなる歌が集成されているかをみておきたい。春と秋のはじめの項目〈春立つ日〉・〈秋立つ日〉はいうまでもなく節月的四季観によって季節の到来を詠んだ歌を収めたものである。それに対して夏と冬のはじめの項目〈はじめの夏〉・〈初冬〉は、暦月的四季観と節月的四季観のいずれに基づくものなのだろうか。まず、〈はじめの夏〉項をみてみよう。

㉛花鳥も皆ゆきかひてむば玉の夜のまに今日の夏は来にけり　（六八）

㉜いづこまで春は往ぬらん暮れはてて別れし程は夜になりにき　（六九）

㉝花散れる道のまにまにとめくれば山には春も残らざりけり　（七〇）
㉞明け暮るる月日もあれど時鳥なく声にこそ夏は来にけれ　（七一）

右の四首のうち、出典となった歌集の詞書から詠歌の日付がわかるのは、㉜の一首のみである。同歌は『伊勢集Ⅰ』に「四月一日、宮にて」の詞書[18]とともにみえており、四月一日に「春と別れたのは昨夜のこととなってしまった」との感懐をもらしたものである。当該歌を除く三首は、立夏の詠とも四月一日の詠とも出典に明示されていないのであるが、結論からいえば、いずれも四月一日を夏の到来する日とした歌として当該項目に位置づけられているのではなかろうか。というのも、明確に立夏を詠んだとみられる歌が同時代の歌集に存在しない[19]一方で、四月一日を夏のはじまりと詠んだ歌の例は複数見受けられる[20]からである。このことをふまえれば、「四月一日とも立夏とも考えられる」[21]と注される㉛についても、やはり四月一日の夏の到来を詠んだ暦月的四季観の歌とみるべきではなかろうか。

〈はじめの夏〉項には、「花鳥も皆ゆきかひて」（㉛）や「山には春も残らざりけり」（㉝）[22]とあるように、暦の上での春を迎えるや否や春らしい景物が消えさってしまったことを詠んだ歌が集成されている。そこには、暦月の四月を迎えると同時に春が終焉し、夏が到来すると考える暦月的四季観が現われていよう。

最後に〈初冬〉項の歌二首をみてみよう。

㉟木がらしの音にて秋は過ぎにしを今も梢にたえず吹く風　（二〇八）
㊱神無月ふりみふらずみ定めなき時雨ぞ冬の初めなりける　（二〇九）

〈初冬〉項は、〈はじめの夏〉項と同様に、前の季、つまり秋の終焉を詠んだ歌と冬の到来を詠んだ歌とを収めている。㉟は、秋が終わったにもかかわらず秋らしい風が梢に吹いているとして、去ったはずの秋の名残を風に見いだした一首であり、㊱は、神無月の時雨こそが冬のはじめだと詠んだ歌である。ここでは十月一日という日付が明示されるわけではないが、㊱に神無月という暦月が示されることからして、やはり〈初冬〉項でも暦月的四季観が中心に据えられているといえるだろう。

以上みてきたように、春と秋のはじめの項目〈春立つ日〉、〈秋立つ日〉が節月的四季観に基づいているのに対し、夏と冬のはじめの項目〈夏のはじめ〉、〈初冬〉も、原則として暦月的四季観に基づいているのであった。これは『古今集』四季部にみられた季のはじめのあり方を継承し、それをさらに明確なかたちで提示したものとみられるのである。

おわりに

本稿では『古今集』四季部と『古今六帖』歳時部を中心として、春夏秋冬の季のはじめとはてにどのような歌が配されているかに検討を加えてきた。両集では、原則として暦月的四季観、すなわち一～三月を春、四～六月を夏、七～九月を秋、十～十二月を冬とする考え方によりながら、春の到来と秋の到来については節月的四季観によるという方法が取られている。それは日本に古くから根づいていた四季観ではなく、『古今集』撰者が歌集を構成するなかで新たに着想したものであった。『古今六帖』はその『古今集』的な季のはじめ・はてのあり方をさらに推し進め、〈はじめの夏〉項に『古今集』ではみられなかった四月一日詠を配したり、〈夏のはて〉項に六月尽詠を複数配したりして、より整然としたかたちで四季のはじめ・はての歌を集成したものといえる。この四季観は後世の諸歌集にも引き継がれ、のちの四季歌の表現に小さからぬ影響を与えたのであった。

なお、本稿では詳述しえないが、季のはじめとはてにどのような歌を配するかについては、歌集によって小異が存する。参考として、本稿の末尾に、八代集において季のはじめとはてがいかなる様相を呈しているかをまとめた〈表Ⅲ〉を付しておく。この一覧表によれば、春のはじめに立春ではなく正月一日を据えた歌集があることや、冬のはじめに十月一日を明示

した歌を配した歌集はほとんどないことといった、歌集ごとの特徴がうかがい知られよう。

※『古今六帖』の本文は『細川家永青文庫叢刊　古今和謌六帖　上・下』（汲古書院、一九八二～一九八三年）に拠った。また勅撰集の引用は『新編国歌大観』に、私家集は『新編私家集大成』に、歌合は『平安朝歌合大成　増補新訂版』に拠った。

1 風間書房、一九九〇年

2 和歌や物語にみえる節気や暦月にかかわる表現を論じる際、必ずといってよいほど言及される著作であり、渦巻恵「平安和歌における節気と暦月意識についての考察―初期定数歌の構成を軸に―」（『平成国際大学論集』二三、二〇一九年二月）のように、その二元的四季観をめぐる見解をふまえた論考が現在もみられる。

3 「正月三日……よませたまひける」（春上・八）、「八日の日よめる」（秋上・一八三）など。

4 宇多法皇主催の歌合で、兼日題の撰歌合とされる。歌人が左右の方分けに所属して歌合の場に臨んだものではないようで、同一歌人の歌が、あるときは左方の歌、あるときは右方の歌として出されている。後掲⑦・⑧の躬恒の歌のように、同一歌人の歌が同番に左右から出された箇所もある（『平安朝歌合大成　増補新訂版』）。

5 室城秀之『和歌文学大系　古今和歌六帖　上』（明治書院、二〇一八年）

6 当該歌は『古今六帖』六七番歌でもあり、同集の注釈書に指摘がある（古今和歌六帖輪読会『古今和歌六帖全注釈　第一帖』お茶の水女子大学附属図書館、二〇一三年）。

7 平岡武夫「三月尽―白氏歳時記―」（『研究紀要』一八、一九七六年三月）、小島憲之「四季語を通して―「尽日」の誕生―」（『国語国文』四六―一、一九七七年一月）、太田郁子「『和漢朗詠集』の「三月尽」・「九月尽」」（『国文学　言語と文芸』九一、一九八一年三月）、田中幹子「『古今集』における季の到来と辞去について―三月尽意識の展開―」（『中古文学』創立三十周年記念臨時増刊号、一九九七年三月）など。

8 森本直子「古今集における漢文学の日本的受容―「弥生のつごもり」・「長月のつごもり」歌について」（『学習院大学人文科学論集』一〇、二〇〇一年九月）

9 業平による白詩受容については片桐洋一「伊勢物語と白詩―その方法と本質」（『伊勢物語の新研究』明治書院、一九八七年）に詳しい。

10 菊池靖彦「『古今集』の構成―そのⅠ・四季と恋」（『古今的世界の研究』笠間書院、一九八〇年）

11 田中智子「古今和歌六帖「雑思」の構造―古今和歌集恋部との比較を中心に―」（『中古文学』一〇一、二〇一八年六月）

12 田中智子「古今和歌六帖「歳時部」の構成―暦月を中心に―」（『古今和歌六帖とその時代』東京大学大学院人文社会系研究科博士論文、二〇二〇年）

13 田中智子「古今和歌六帖の目録をめぐる諸問題―目録の成立に関連して―」（『中古文学』一〇五、二〇二〇年五月）

14 注13の旧稿で指摘したように、永青文庫本をはじめとする『古今六帖』の諸本の帖ごとの目録では春夏秋冬別に項目が改行して示されており、そこにも四季で項目を区分する方針が認められる。

15 立春・立夏・立秋・立冬の前日を「節分」という。

16 注2渦巻論文。

17 『古今六帖』が『古今集』の配列構造をふまえ、『古今六帖』なりの配列構造を構築したことについては注11・12・13の拙稿でも指摘した。

18 『伊勢集Ⅲ』（正保版本歌仙歌集）では「せちぶんのつとめて、四月朔みやにて」とあり、それに従えば、この年、四月一日が立夏の日でもあったことになる。

19 立夏を詠んだ確実な歌作が存在しないことについては、松田聡「大伴家持のホトトギス詠―万葉集末四巻と立夏―」（初出二〇一四年、『家持歌日記の研究』塙書房、二〇一七年）に詳しい。

20 「春はただ昨日ばかりを鶯のかぎれるごとも鳴かぬ今日かな」（公忠集Ⅰ・七・同じ御時に、四月一日、鶯鳴かぬよしの歌詠めと仰らるるに）、「過ぎにける花を惜しむとながむれば面影にこそ春もながむれ」（安法法師集・九三・四月一日）など。

21 『和歌文学大系　古今和歌六帖　上』

22 平田喜信「作品としての古今和歌六帖」（『平安中期和歌考論』新典社、一九九三年）に指摘があるように、㉝は『古今集』では「三月のつごもりがたに、山を越えけるに、山川より花の流れけるを」の詞書とともに、春下の巻末近くに配されている（一二九）。つまり『古今六帖』ではこの『古今集』詞書の伝える事情にとらわれない分類が試みられていることになる。

［付記］本稿は科学研究費補助金若手研究（課題番号２０Ｋ１２９３９）（二〇二〇～二〇二二年度）による研究成果の一部である。

〈表Ⅲ〉

		古今集	後撰集	拾遺集	後拾遺集	金葉集二	金葉集三	詞花集	千載集	新古今集
春	はじめ	立春	正月一日	立春	正月一日	立春	明示せず（初春）	立春	立春	立春
	はて	三月尽	三月尽	閏三月尽	三月尽	三月尽	三月尽	三月尽	明示せず	明示せず
夏	はじめ	明示せず	四月一日（更衣）	四月一日（更衣）	四月一日（更衣）	四月一日（更衣）	四月一日（更衣）	四月一日（更衣）	四月一日（更衣）	明示せず（衣）
	はて	六月尽	閏六月	明示せず	六月尽（夏越祓）	明示せず（秋隔一夜）	六月尽（夏越祓）	明示せず	六月尽（夏越祓）	六月尽（夏越祓）
秋	はじめ	立秋	立秋	明示せず（秋の初）	立秋	立秋	明示せず（初秋）	明示せず	立秋	明示せず
	はて	九月尽	九月尽	明示せず（暮の秋）	九月尽	九月尽	明示せず（秋尽）	九月尽	九月尽	閏九月尽
冬	はじめ	明示せず（神無月）	明示せず	明示せず	十月一日	明示せず（神無月）	明示せず（神無月）	明示せず（神無月）	明示せず（初冬）	明示せず（初冬）
	はて	歳暮	歳暮	歳暮か	歳暮頃	歳暮	歳暮	歳暮	歳暮	歳暮

※金葉集二度本は「金葉集二」、金葉集三奏本は「金葉集三」と記した。
※当該の勅撰集にみえる詞書と歌の表現から、それがいつの詠歌と判断できるかを記した。
※暦月的四季観と節月的四季観のいずれによるものか分からない場合は「明示せず」としたが、たとえば「神無月」の語が詠み込まれているなど、暦月や節月との関わりを思わせる表現がみられる場合には（　）で示した。